

## 優しさに包まれた病院

山口県 安禅寺 住職 村上邦明

先日、私は近くの耳鼻科で鼻の不調がなかなか良くならないため、大きな病院を紹介してもらいました。先生の「大きな病院で診てもらおう」という言葉に、私は少なからず動揺しました。「重大な病気にかかっているのでは？」と受診日まで不安いっぱいでした。

大きな病院に行き、色々な検査をしました。その日だけでは終わらず、「明日は他の科で診てもらいます。できれば、ご家族も一緒に来てください」と言われ、「やっぱり重大な病気なのかなあ」と、さらに心の動揺が大きくなりました。しかし、結果は大きな病気ではなかったのです。が、治療のために一週間ほど点滴をすることになりました。

その大きな病院で、私はあることに気づきました。病院という場所は、「多くの優しさが交差している場所」だということです。それは点滴をしている時のことでした。患者さんが多いため、たくさんの人が間をあけることなく採血に来られます。その度に看護師さんは優しい声で「どっちの手にしようかね」「痛くはないですか」「お仕事お忙しいですか」「楽になさってくださいねえ」と温かい言葉をかけています。

その優しさに心が和むのでしょうか。患者さんもいろいろな話を、その場の雰囲気や和んでいます。帰る時には「痛くないようにしてくれて、ありがとう」と患者さん。看護師さんは「お大事に」「気を付けて」「無理せんようにね」と優しい言葉をかけます。看護師さんと患者さんが接する時間は5分ほど、その5分の会話が、次々に点滴中の私の耳に入ってきます。

その空間は、何とも優しい雰囲気や包まれています。患者さんに接する看護師さんの表情はわかりませんが、その声を聞くと、看護師さんは和やかな顔でお話されているのだろうと想像できます。そんな心地よい雰囲気の中にいたので、1時間という点滴の時間を苦痛に感じない私がありました。そして私は、看護師さんと患者さん双方に、相手を思いやる真心の言葉が交わされていることに気づきました。一方私自身は、自分の病気のことばかり気にして、相手も思いやる優しさをもていなかったことを痛感しました。

お互いがお互いを思いやり、優しい真心の言葉を交わす、このような関わりによって、私たちの日常は心温かなものになることを、優しさに包まれた病院が教えてくれました。